

『二十歳のエチュード』

○君。君から原稿を依頼されて、何を書こうかと考えたが、ちょうどM君から借りた原口統三の遺稿『二十歳のエチュード』を読みおえたところだったので、この本について何か書くことにした。これはちかごろ強い感銘と同感をもって読んだ本なので、それについて書けばいくらでも書けそうでもあるし、反対に書くことは何も無いようでもあり、妙な気持におそわれたが、やっぱり書かないではいられない気持の方が強くて、ともかく書いてみることにした。そして、いざ筆をとって書く段になると、この拙い文章に共鳴してくれそうな、だれか特定の人に話しかける形にした方が、わたしには書きやすいように思えた。いや実をいうと、このころ読者一般というものを頭に描きながら物を書くことがいやになったのだ。わかってもらえるかどうか分からない人の寄り集まった聴衆に対して、それでも何とかしてわからせようとあせり気味で話しかける仕方が、今のわたしの気持にじっくり来ないのだ。ピンと手ごたえのありそうなところを見かけて

物を言ってみたいのだ。ところで、そういう人ならだれでもいいわけだが、幸いに、君の先日来の告白から想像して、これからわたしの書くことが、どうやら君にはわかってもらえそうに思ったので、ともあれ、〇君！と呼びかけてみたわけだ。もっとも、君が、ぼくは知りませんよとそっぽを向けば、それまでだが――。

さて、『二十歳のエチュード』は、一高の生徒だった、「二十歳にして野心を喪失し、二十歳にして青春を喪失し、二十歳にして記憶力を喪失し、二十歳にしてありとあらゆるものを喪失し、二十歳にして人生を喪失した男」――原口統三が、死の直前まで書きつづった感想録である。「自己の思想を表現してみることは、所詮弁解に過ぎない」という「最後の反省」とともに、原口は海に身を投じて死んでいった。言葉は妥協であり、許容であり、弁解であるということ、一冊の本になるほどくり返し語ったものが、この感想録である。こういう考えを極度におしつめてゆくと、けっきょく「沈黙」ということにつき当たる。そして原口は遂に永遠の沈黙の国へ旅立ったのである。

○いかなる思想も、何らかの「妥協」の衣を着せて提出しなければ通用しない。

○道標がなければ人々は動けない。それは彼等に安心を与へると共に彼等を束縛する。われわれはどんな道標をも無視することが出来る。――純潔の名に於て。

○無垢。この壊れやすい僕の唯一の金剛石。

○僕の誠実さが僕を磔刑にした。

○思想表現の確たる規準となるものが一般に見当たらない時代には、政治家が幅をきかすのは当然である。しかし政治家だけが「強い生き方」とは限らないのだ。黙々と機械と取り組む一人の技師の姿を、君は弱い生き方だと思ふだらうか。いづれにしても人の思惑を無視するだけのものを所有しなければならぬ。

○「病的な程潔癖でありながら、そのくせ心の底では熱烈なロマンチスト。」これは中野が僕の為に作ってくれた最後の名刺である。

○表現は所詮自己を許容する量の多少のあらはれに過ぎぬ。

○誠実さは常に全き孤独の中にある。

.....

こうして書き抜いてゆけば際限がない。「純潔」「清純」「潔癖」「誠実」、これらの言葉も原口がたびたびくり返すところであった。ただ一途に、純潔であり清純であり誠実であらうとするとき、そこから必然的に言葉は妥協であり弁解であり許容であるという反省は導かれてくる。二十歳の原口の鋭感が、終戦直後の祖国にあって感じとったものが、自身をしてこの一路をまっしぐら

らにたどらせずにはおかなかった事実を、わたしは心から痛ましく思うのだ。つぎの美しい言葉を聴こう。

祖国へ寄せる哀歌

「語らない日本」こそ、母国のほんたうに美しい姿だ、と僕は思ふ。われわれの国語は、元来、人に聞かせるやうに作られてゐるものではない。吐き出すのではなく、口に含んでみる言葉なのだ。しとやかに、つつましく——これが日本語発声法の正統だ。お喋りな日本人の顔ほど、滑稽、醜悪なものはない。僕には現代人が、落語家や万才師の類にしか映らないのだ。

これは現代の日本への痛烈な批評でもある。こんにちの青年が、青春の純潔を一途に守り通そうとするとき、けっきょくは、この原口の道をたどらざるを得ないのでないか。

だが、それでいいのだろうか、という反問が、心の片隅から頭をもたげてくる。いや、「死」を選ぶことは極力避けられねばならぬ。それではどうするか。この窮極喫緊の問題については、君とゆっくり話し合う機会を、これから何度でもつくりたいと思う。

(昭和二十五年七月)